

立命館大学大学院  
2017年度実施 入学試験  
博士課程前期課程

# 文学研究科

## 人文学専攻・文化動態学専修

※2017年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	コース	科目	
			専門科目	
			ページ	備考
一般入学試験	9月	高度専門	P.1～	
	2月		P.4～	WEB非公開
社会人入学試験	9月	高度専門		
	2月			
外国人留学試験	9月	高度専門		
	2月			
	2月 (2018年9月入学)			
学内進学入学試験	9月	高度専門		
	2月			
学内進学入学試験 (大学院進学プログラム履修者対象)	9月	高度専門		
	2月			
APU特別受入入学試験	9月	高度専門		
	2月			
	2月 (2018年9月入学)			

## 文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

以下の課題文①～④を読み、次の二つの問いに答えなさい。なお、課題文は、ジャック・デリダ著、廣瀬浩司訳『歓待について』(産業図書株式会社、1999年)からの抜粋である。

- (1) 課題文①は、越境し「領域」内に入ってくる「異邦人」を受け入れる際のある観点から、課題文②は、その「異邦人」の立場のある観点から、述べられている。課題文の内容を、それぞれ150字程度で要約しなさい。
- (2) 課題文③と④は、「異邦人」の歓待の際に生じる事柄が、課題文①と②と同様、それぞれの観点から述べられている。いずれか、または、両方の内容を踏まえ、「領域」を超えることについて、あなたの考えを述べなさい。また、それは、あなたの研究課題とどのように関連づけられるか、説明しなさい。

## 【出典】

ジャック・デリダ(著)、広瀬 浩司(訳)、「歓待について—バリのゼミナールの記録」、pp.97-99, pp.105-106, pp.128-131, pp.135-138, 産業図書, 1999年

Jacques Derrida, *De l'hospitalité*, p.71, 73, 81, 83, 109, 111, 113, 117, 119, 121, Calmann-Lévy, 1997.  
Reproduced with permission of CFC, Centre Francais D'exploitation Du Droit De Copie.)

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

①

① 歓待の一步は「待たない」(Pas d'hospitalité)。  
 われわれは進んでゆきます。移動してゆきます。侵犯から侵犯へ、そしてまた脱線から脱線へとこのことは何を意味するのでしょうか、この余分な一步、そして脱線は、もし、招かれた者として訪問者にとって、固い戸口(固い)の通過がつねに侵犯の一步であり続けるとするならば、さらには、侵犯であり続けるべきだとするならば、そしてこの鮮明の一步、脱線は何を意味するのでしょうか。この奇妙な歓待の訴訟過程はどこに就いているのでしょうか。終りなきがゆえに越えがたきこの間は、そしてこのアポリアは？ あたかも困難から困難へと進んでいるのでしょうか、すべては進行します。よりよいことへなのか、より悪いことへなのか、それはわかりませんが、より重大なものへ、不可能性から不可能性へ。あたかも歓待とは、不可能なものであるかのように、すべては進行します。歓待の捉は、この不可能性そのものを規定しているかのように。ただそれを越境することしかできないかのように。あたかも絶対的で、無条件で、誇張的な歓待の唯一、無二の捉(捉)が、つまり歓待の宣言命法が、歓待のもろもろの捉(捉)をすべて侵犯せよと命じているかのように。歓待のもろもろの捉とは、歓待におけるさまざまな条件、規範、権利そして義務のことです。それは、主人(捉)と女主人(捉)とつまり迎え入れを与える男女と、迎え入れを受けける男女に課せられるのです。反対に、歓待のもろもろの捉とは、限界、権力、権利、義務などを記しつけながら、歓待の唯一、無二の捉に対して挑戦し、それを越境することであるかのように、すべては進行します。到来者に無条件の迎え入れを提供することを命令する唯一、無二の捉は、  
 到来者には「(捉)と書かなくてはなりませんか、あらゆる限定以前に、あらゆる先取り以前に、あらゆる同一、定、以前に。到来者が異邦人であろうとなかろうと、移民、招待客、不意の訪問者などであろうとなかろうと、他国の市民であろうとなかろうと、人間、動物あるいは神的存在であろうとなかろうと、生者であろうと死者であろうと、男であろうと女であろうと、ウィと書かなくてはなりませんか。  
 言い換えるならば、二律背反(anthracite)があるのでしょ。一方には、歓待の唯一、無二の捉(捉)があります。すなわち、限らない歓待の無条件な捉(到来者に我が家のすべてやおのれの自己を与えること、名前も代償も求めることなく、どんなわずかな条件でもみたくことを求めること)もなく、彼におのれの固有なもの、われわれの固有なものを与えること)があります。他方には、歓待のもろもろの捉、つねに条件づけられ、条件的な権利と義務があります。それはギリシャラテンの伝統、さらにはユダヤキリスト教的な伝統が規定するものであり、そして法(権利、カントからヘーゲルに至る法哲学が規定するものです。この法哲学は、家族、市民社会、そして国家を通過していきます。このように、唯一、無二の捉ともろもろの捉のあいだには、解消できない二律背反、弁証法化することができな二律背反があるのでしょ。  
 この点にこそ、アポリアが、ひとつの二律背反があるのでしょ。まさに問題になっているのは捉(dominion)なのです。この真意は、捉を自然や経験の事実に対立させるものではありません。二つの捉の衝突、捉の二つの体制の境界における対立が起って、そのどちらも経験的な捉ではありません。歓待の二律背反は、その普遍的な特異性(単数性)と(捉)における唯一、無二の捉、妥協不可能なかたちで複数性に対立させます。この複数性はたんなる散逸状態(もろもろの捉)ではなく、分割と分化のプロセスによって構造化され、限定された多数性です。言い換えるならば、おのれの歴史と人間学的な地理をさまざまに分配し、もろもろの捉によって構造化され、限定された多数性なのです。

②

② 「強制移住させられた人々」(Gasmen detached)「すなわち亡命者、強制収容所の被収容者、追放者、故郷喪失者、遊牧民などは二つの願い、二つのノスタルジーを持っています。それはおのれの死とおのれの言語です。一方で、彼らは殉教の地としてでもよいから、埋葬された死者たちが最後の住まい(墓所) (la dernière demeure) を持つ場に戻りたいと考えています(家族の墓所とは、基準となるエートスや住居の位置を定めてくれるものであり、これを起点に我が家、都市、国などを規定することができるのです。そこでは親戚や父や母や祖母が休息して横たわっており、その不動の場からあらゆる旅や距離を計ることができるのです)。他方で、亡命者、強制収容所の被収容者、追放された人々、故郷喪失者、無国籍者、無法の遊牧民など絶対的な異邦人たちは、言語、いわゆる母語をおのれの祖国、さらには最後の住まいと認めることが多いのです。これがあの日ハナナ・アレントの答えでした。彼女は言語に関して以外には、自分がドイツ人だという気がしなかったそうです。あたかも、言語が所属の名残(捉)であるかのように。実は事態はもう少し屈折しているのですが、そのことは後に述べましょう。言語というものが所属の最初のそして最後の条件であるかのように見えても、まさにそのことによって、言語は所有(捉) (expropriation) 還元できない自己固有性(捉)の所有(捉) (expropriation) の経験でもあります。「母(捉)と呼ばれる言語(捉)はすでに「他者の言語」なのです。言語とは祖国であり、すなわち世界中の亡命者、異邦人、さまざまなるすべてのユダヤ人たちが靴底に携えて歩いているものだ、とわれわれが言ったとしても、もちろん怪物的な身体、不可能な身体、口や舌が足を持っていたり、さらには足の下にまで垂れ下がっているような身体を想像させるためではありません。そうではなく、ここではまた歩み(捉)が問題であるということ、進行と攻撃と侵犯と脱線の歩み(捉)が問題であるということが言いたいのです。そもそも言語は、母語と言われる言語は何を名指すのでしょうか。ひとがおのれとともに運び、出生から死に至るまでわれわれを運ぶものである言語は？ それはけっしてわれわれのものを去ることのない我が家を表しているのではないのでしょうか。固有なものや所有物(捉) (proprieté) を、あるいは少なくとも所有(捉) (propriété) を表しているのでしょうか。身にとりまとうような所有物のフアンタスムを表しているのではないのでしょうか。母語なるものは、身にとりまとう第二の皮膚のようなもの、移動式の我が家なのではないのでしょうか。しかしそれはわれわれとともに移動するのだから、取り外しのできない我が家でもないのではないのでしょうか。  
 家の主人は「家の戸口」(捉) (deus in domo) で気もそそろに見知らぬ客(捉) (homo in domo) のおとすれを待ちうけている。やがて主人は、地平線のかたから客人が救い主のように現われるのを目にとめる。遠くの方に客人の姿が見えると、いち早く主人は彼に大声で呼びかける。「はやくおはいりなさい。はやくおはいりなさい。」「はやく」というのは、つまり遅れをとることなく、また待つこともなく、おはいりくださいということ。待つことのないものを待つこと、これが欲望なのです。客は急がなければなりません。異邦人(捉) (homo in terra) が入ってくる運動において、欲望は、その破壊を起点に時間を測定しています。異邦人(捉) (homo in terra) の場合待たれる客は、たんに「来なさい」と言わ

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

れる誰かではありません。客は「おはいいりなさい」待つことなくおはいいりなさいと言われる誰かであり、われわれの家で待つことなくお休みなさい、急いでおはいいりなさい「中に来なさい」「私の中に来なさい」と言われる誰かなのです。たんに私に向かつてではなく、私の中になのです。私を占領しなさい、私の中に場所を占めなさい(「お座りなさい」)。このことは同時に、私の代わりにもなりなさい (breadbasket marriage)、私を迎えに来たり、「私の家」に来ることだけで満足してはいけません、ということも意味します。聞を通ずること、それは入ることであり、たんに近づいて来たりすることではありません。気もそそるに、客を救済者ないしは解放者として待つている主の論理は実に奇妙なものです。われわれに多くのことを教えてくれます。あなたも客が鍵を握っているかのようにではありませんか。異邦人の状況は政治においても同じです。異邦人(「外国人」)は外からやって来て、国や家、我が家に入り、立法者として法を作り(「場を支配」) (take over)、民族や国家を解放します。民族や国家は異邦人に呼びかけたうえで、彼を入らせるのです。あなたも(「つねに」あなたも)が法を作る(「支配する」)異邦人が主人を救い、客(「客」)の権力を解放することができるといふように、要するにオナイアプスと同じです。オナイアプスの死に場所について守られた秘密も、都市を救ったり、先ほど読んだ契約によって救いを約束していたりしてました。あなたも主人というものは、まさに主人として、おのれの場所と権力、自己性、主観性の囚人であるかのように(その主観性が人質です)。だから、主人つまり招待者、招待する主人こそが人質となる——いや実はつねに人質になってしまっているでしょう。そして客 (「客」) すなわち招かれた人質 (「客」) は招待者の招待者となり、主人 (「客」) の主となるのです。host is host of the host となる。つまり客 (「客」) が主人 (「客」) の主人 (「客」) となるのです。

この置き換え(「身代わり」)によって全員が互いの人質となります。これこそが接待の旋回のです。それは書の冒頭ですでに予告されている「困難なことから」や、そこで発せられたアポリアに対応します。まずそれは報告されます。それも語り手自身、すなわち甥によって、甥とは直系の息子ではない家族のひとりであり、擬似的な父殺しとして振る舞うこととなります。この「困難なことから」は「ガラス張り」の接待の旋回の引用がなされるより前に、すでに予告されてしまっていることでしょう。それを定式化することは可能でしょうか。おそらく可能でしょう。ただし、「ごく単純に見える二律背反に従うならば、すなわち、両立不可能な二つの仮説の同時性、二つの仮説の「同時性」(「同時性」)の二律背反に、「ひとは、「ひとりの女」を同時に抱いたり、抱かないでいたりすること、そこに同時に居あわせたり、居あわせないでいることは不可能だし、内部にいながら入ることはできない。」

ところが、この「同時に」の不可能性、それは同時に、起きる(「到来する」)ことでもあります。ひとたび、そしてそのたびに、起きるであろうことであり、つねに起きることでもあります。ひとは抱くことなしに抱く。主人は「客を」受け入れ抱き、迎え入れる。ただし「彼の」招待者や語り手の伯母である「彼の」妻を、客として取ったり抱いたりすることなしに、また内部から入ることができる。家の主人は自分の家にいるが、客の力を借りて自分の家になんとか入り込むことができるのです。外からやってくる客の力を借りて、だから、主は内部から入るのです。あなたも外から来たかのようにして、彼は訪問者の力(「客」)を借りて自分の家に入り込みます。自分の客の恵み(「客」)によって、このように二律背反は完全に矛盾し続けており、またそうではなくてはならないのですから、出来事は長く続きはしません。語り手ははつきり述べています。ところが、それは長続きしない。なぜならひとは、ひとりの女を同時に抱いたり、抱かないでいたりすること、そこに同時に居あわせたり、居あわせないでいることは不可能だし、内部にいながら入ることはできないからだと。

④

この「言語」という言葉を広義にも狭義にも理解する必要があるでしょう。接待の概念や異邦人の概念の広がりを問題にしたときと同じように、ひとつの困難が立ちはだかかってきます。それは、いわゆる広い意味と厳密な意味の間の差異、そして両者の多かれ少なかれ密着した関係、ふたつの意味の狭隙(「狭隙」)の問題です。異邦人に声をかけるための言語、そして聞くことすればの話ですが、異邦人の声を聞くための言語は、広義には、言語に宿っている文化の総体、価値、規範、意義などをさします。同じ言語を話すということは、単なる言語学的な活動ではありません。エートス一般の問題なのです。ついでに付け加えておきましょう。たとえ同じ国民言葉を話さなかったとしても、もしその人が私と文化を共有したとせばある同じ生活様式を共有していたとしたならば、私は別の「社会階級」とかつて呼ばれていたもの(この言葉については、もちろん批判的な注意が必要なのですが、それをあつさり捨ててしまっただけで構いません)に所属する同胞や同国人よりも、「異邦人」である度合いが少ないこともあり得ます。少なくともある点では、私は言語を共有しないパレスチナのブルジョワ知識人と共通点を持っています。それに対して、なんらかの社会的・経済的理由やその他の理由によって、ある観点からすれば、あるフランス人がもつとよそよそしい存在になるでしょう。それに対して言語という言葉を厳密に解するならば、それは固着と重なることはなく、その意味ではイスラエルのブルジョワ知識人は、スイスの労働者、ベルギーの農民、ケベックのボクサーやフランス人警察官などよりも、さらによそよそしい存在になるでしょう。このいわゆる狭義の言語、つまり、市民権とは一致しない言語上の特有言語(たとえばフランス人とケベックの人、あるいはイギリス人とアメリカ人はおおかた違って同じ言語を話す)としての言語についての問いは、つねにさまざまに形で接待の経験の中に含まれていることでしょう。招待を迎え入れ、庇護、住居提供などは言語をいしは他者への呼びかけを経由します。レイウナスが別の視点から述べているように、言語とは接待である(「客」)ということなのです。われわれはつねに問うていては他者への呼びかけを停止することにあるのではないかと、つまり他者に対して、あなたは誰だ、名前は何か、どこから来たのだ、などと尋ねたいという誘惑は抑えなければならぬのではないかと、さまざまに必要條件を通告するような問いを問うことは抱えなければならぬのではないかと、さもないと接待には限定が加えられ、権利と義務に縛り付けられ、そこに閉じこめられてしまうのではないだろうか。こうして接待は、循環的な経済(「配分法則」)に閉じこめられてしまっているのではないかと、とわれわれは問うてきたのです。つねにジレンマが狙っています。一方には、権利と義務、さらには政治を越える無条件の接待があり、他方には権利と義務によって囲い込まれている接待があります。つねに一方は他方を墮落させる可能性を持ち、この墮落可能性を還元することはできません。それは還元不可能なものであるべきなのです。たしかにこの自虐(「来なさい」)入りなさい、私の家にとどまりなさい、お前の名前は聞きます、責任を持ってと言います、どこから来てどこへ行くのか、などとも聞きます(「の」)のほが、留保なき贈与を提供する絶対的な接待の名により、さわしく見えます。そしてそこに言語の可能性を見出す人もいます。黙して見ること、それはすでにありうべき言葉の一種類なのです。われわれは言語や接待の概念のこうした二つの意味の狭がりの間でもぎつねつけなければならぬでしょう。また接待の旋回の二つの体制についても後に述べる機会があるでしょう。一方では無条件で贈与的な接待があり、他方では条件付的・政治的な接待、さらには倫理的な接待があります。実を言えば、倫理というものは、それが住まう場所を、絶対的な尊敬と贈与に合わせるか、交換や均衡や規範などに合わせるかによって、二つの方向に引張られています。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

この問題は、著作権の関係上、公開することができません

(次のページに続く)

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (文化動態学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース 高度専門	受験番号	氏名
------------------------------	------------	------------	-------------	------	----

この問題は、著作権の関係上、公開することができません

問1 上の文章の要旨を、このページ内の以下のスペースに収まる程度の文字数で記しなさい。

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	高度専門		

問 2  の考えに対して、あなたはどのような見解をもちますか。このページ内の以下のスペースに収まる程度の文字数で記しなさい。

※□部分は、著作権の関係上、公開することができません

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---